津波被災地の生活復興に向けた地域性に関する研究

青木 佳子（東京大学 生産技術研究所 特任助教）

〔研究報告要旨〕

岩手県陸前高田市は、震災から８年が経過し、新たな都市計画が進んでいる。嵩上げされた土地に新たな新市街地を形成し、2018年９月には、「まちびらきまつり」として、まちびらきを宣言し、式典やまつり等イベントが開催された。

本調査にて、現状を把握するための、住民や市役所、商工会議所へのヒアリングや視察調査を行った。また、一貫して出版されている旅行案内書から、そのなかで取り上げられている、場所ごとに人々が抱く一般的なイメージに関する記述を時代ごとに抜粋した結果、陸前高田市が高田松原を中心とした自然豊かな都市を目指して以降、その姿は2002年には「自然豊かなリゾート都市」として確立したことが分かる。また、「高田の松原」はどの出版年の案内書にも取り上げられてきたことから、陸前高田市の政策に呼応する形で、人々の見どころも高田の松原を中心としたレクリエーションであり、その周辺の飲食店が一番の観光名所だったことが分かる。

現在、新たな道の駅が建設中である。復興を中心とした観光を沿岸部に誘致した際に、人々のくらしとなる市街地である「まちなか」と観光が分断されてしまうことが懸念される。かつての陸前高田は、生活の中に高田松原があり、暮らしのなかに観光拠点があるなど、非常にコンパクトなまちであった。現在は奇跡の一本松に多くの観光客が訪れるが、今後はその周辺のみの観光に留まらず、「まちなか」への観光客誘致が課題となる。

まちなかの、居住者と観光客の両者を見据えた計画を行いながらも、かつての自然豊かなレクリエーションを意識したまちづくりを目指すことが重要であると言える。